「小林秀雄に学ぶ塾」に参加して（発表報告）

国語科　植　田　敦　子

1. はじめに

2012 年から、鎌倉の小林秀雄旧家で行われる「小林秀雄に学ぶ塾」（通称池田塾）に参加している。その中で年に一回の発表を何度か行った。今回はその発表報告を行う。

２．発表テーマ

2012 年　「歌」とは何か（小林秀雄『美を求める心』より）
2013 年　「あや」とは何か（小林秀雄『本居宣長』より）……3．章 1
2015 年　「道」について（小林秀雄『本居宣長』より）……3．章 2
2016 年　「本」と「末」について（小林秀雄『本居宣長』より）……3．章 3
2017 年　「情」と「欲」について（小林秀雄『本居宣長』より）……3．章 4

なお、この勉強会は新潮社で小林秀雄の編集担当であった池田雅延氏にご教示をいただき行っている。発表の形式は、毎年 3 月に質問したい箇所を池田氏にお送りし、5 月以降『本居宣長』五十章を 5 章ずつ 10 回に分けて、該当箇所で質問を出したものが発表を行う。本稿では自身が発表したもののうち、現在発表原稿が残っている 2013 年から 2017 年までのものについて、大幅に手を加え掲載する。また、勉強会では、まず質問事項を 300 字以内でまとめるという作業を行っているので、その形式が残っているものもここに掲載している。

3. 章 1 「あや」とは何か

今回『本居宣長』を読んで、「あや」という言葉の意味がわからないために、歌や言葉について重要なことが書かれている箇所が理解できないと感じており、まず「あや」という語の意味を考え、次に「あや」という語が使われている箇所で何が言われているか見ていく。

『本居宣長』二十三章では、まず「うたふ」や「ながむる」や「なげく」の原義が「声を長く引くこと」であることに触れ、「ああ、はれ」という生の感動の声は、この声を長く引くことによって歌になる、と述べている。

引用された「石上私淑言」では、宣長の「あはれにたえがたい時に『その思ふすぢを、おぼえずいひいづるのが歌だ』という説明に対し、問者が「それは『ただの詞』にても有りぬべき事で、特に歌は『声を長くし、詞にあやをなす』というのが心得難い」と問うたのに対し、例えば切実に悲しい事があって堪えがたい時に、ただの言葉でかなしさに対しつぶつぶと言い続けてもたえがたさはやまず、堪えがたい時は自然と声を高くあげて、あらかなしや、なうなふと長く叫んで、胸にせまる悲しさをはらすも

のだ、その時の言葉は、自然と程よく文があり、其の声は長く歌うのに似ている、これすなはち歌の形であり、ただの言葉とは必ず異なるものである」と答えている。また、「おのづから文ある辞が歌の根本にして、歌の真なり」とも述べていて、つまり、歌とはほどよく「あや」があり、声を長く引くものであり、また「あやある言葉によって歌になる」と言っている。

これを受けて、小林氏は『本居宣長』259 頁の 10 行目で、「ここに宣長の、『ただの言葉』より発生的には『歌』が先だという考え、『歌』よりも声の調子や抑揚の整うことが先だ、という考えが透けてみえる」と述べている。つまり、声の調子や抑揚が整うことによって歌となるということで、先ほどの「文ある辞が、歌の根本にして、真の歌なり」という宣長の言葉と照らし合わせて考えると、「あや」があるとは、「声を長く引いた、または歌の言葉の、その声の調子や抑揚が整っていること」と考える。

さらに、同じく『本居宣長』二十三章での「あや」のほかの用例を見ていきたい。259 頁の 15 行目に、「宣長に言わせれば、歌とは、まず何を措いても、『かたち』なのだ。あるいは、『あや』とも『姿』とも呼ばれている、瞭然たる表現性なのだ」と書かれている。「かたち」とは「形式」のことと理解し、ここでは、歌とは、「あや」があり、五七五七七などの表現形式を持つものである、ということを言っているのだと考えられる。

同著 263 頁 9 行目「あしわけ小舟」の引用部分では、悲しみが強い時は、自然と声に「あや」があり、その「あや」というのは、「哭声がヲヲイヲヲイというのがあやがあるのだ」、「あやをつけて泣くことによって心中の悲しみが発せられる」と言っていて、それは、唐土で、喪の時に哭する礼がある、つまり嘆き悲しむ型があることによって実情が捉えられるのと同じで、自分で捉えられない堪えがたい悲しみがあった場合、自分ではまだ見定められていない、正体のわからない悲しみの嵐が、自然と「あや」ある声の「カタチ」となる時、つまり、「あや」を持つ歌の「カタチ」に整えられていく時、初めて本人がその悲しみを捉えられるのであって、このことを「歌とは意識が出会う最初の物だ」(『本居宣長』(上) P267、6 行目) と言っているのだと考える。

(自身の振り返り)

今回「あや」を調べるにあたって、自分としては本居宣長が「あや」をどう捉えているかを知りたくなり「あしわけ小舟」や「石上私淑言」に遡って用例を集め調べていたが、勉強会はあくまで「小林秀雄の『本居宣長』からの質問・発表」であったので、ジレンマもあった。しかし、実際に宣長の著書を読むからこそ、小林秀雄氏の指摘の鋭さを確認できたのも事実であった。池田雅延先生からも発表後にいろいろご助言いただいたが、「端的に言うとそれは五七五七七のことだ」とおっしゃったのが、一番的を射ていて、「あや」とは「声を長く引いた、その声の調子や抑揚を整え、五七五七七等のカタチに整えていったもの」とまとめることができよう。(本発表で

使用した引用部分は、参考文献のところに、掲載している）

3. 章２ 「道」について

『本居宣長』に度々出てくる「道」という言葉が気になっている。これらの「道」はどのような意味で使われているのだろうか。特に三十七章に出てくる「『歌の事』は『道の事』に直結する」の意味するところ、「歌」と「道」との関係、「道」自体に述べられている、三十七章「『道』ということ」は、論おうにも論いようもない、『神代の古事』であった、四十七章「道とは何かと問われれば、自分は神代の伝説に『見えたるまま』であると答える他ない」という宣長の言葉などを考えてみたい。

「道」ということについて、まず『本居宣長』での用例を拾ってみた。参考資料119Pからが宣長自身が「道」について言及している用例、参考資料123Pからがそれ以外の人が言及している「道」である。『本居宣長』には「歴史」や「言葉」と同じく、呆然とするほどたくさんの用例がある。単純に「方法」という意味で置き換えられるものは除き、「『歌の事』から『道の事』に進んだ」の「道」と同じ意味合いで使われていると思われる用例を中心に考察してみた。

まず、「道」とは何かという問に対しては、『本居宣長』（下）226頁の9行目に「学問の目的は、人が世に生きる意味、即ち『道』の究明にあるという、今まで段々述べてきた、我が国の近世学問の『血脈』による」とあり、また十一章に「宣長が求めたのは如何にいくべきかという『道』であった、学問とは物知りに至る道ではない、己を知る道であるとは、おそらく宣長のような天才には、殆ど本能的につかまれていたのである」とあるので、近世のさまざまな人が「道」とは何かという問題を究明しようとしていて、宣長にとっては「人生如何に生くべきか」ということだと考える。

次に、「道」を知る方法について考察する。十二章に「我邦の大道と云ふ時は、自然の神道であり」とあり、三十七章に「『道といふこと』は、論おうにも論いようもない、『古代の神事』であった」、「何の道くれの道」というような「道という言挙げ」はさらになかったのだし、「神ながら言挙げせぬ国」などの表現から、また「神道には教典がない」と以前聞いたことも考え合わせ、「道」とは「神道」のことも言っていて、宣長は「人生如何に生くべきか」ということを神道に求めようとしたけれども、具体的にこれが「道」だという記述はないので、あげつらおうとしてもあげつらうことはできない、ということかと考えた。その上で「道」を知る方法として、三十三章に書かれているように、「其道は、もろもろの事跡のように備わりたり、この二典の上代の巻巻を繰り返し、繰り返しよく読み見るべし」とあり、『古事記』や『日本書紀』を読むべきだという意味だと推測される。

四十七章に「道とは何かと問われれば、自分は神代の伝説に「見えたるまま」であると答えるに他はない、というところも同様のことを述べていて、道を知るには神代の伝説、つまり古事記に書かれていることをそのまま受け取り、そこに書かれていることを知ることがそのまま「道」を知ることであったという意味だと考える。

また、「歌の事」と「道の事」について、度々言及されていて、十九章に「宣長は『源氏』による『歌まなび』の仕事が完了すると、直ちに『古事記伝』を起草し、『歌の学び』の仕事に没入する」とあり、源氏によって歌を学び、続いて『古事記』によって「道を学んだ」ということであろう。

さらに、「歌の事」と「道の事」は一続きであることが繰り返し述べられている。

「歌の美しさが、おのづから道のただしさを指すようになる」（十九章）

「『歌まなび』と『道のまなび』との二つの観念のあいだに、宣長にとって飛躍や矛盾は考えられていなかった」（十九章）

「歌の事は道の事に直結する」（三十七章）

「出来上がった彼の学問では、道の正しさと歌のよさの間に、本質的な区別など立られはしなかった」（四十章）

等である。

これらから、歌を学び自ら詠み学ぶことは、「もののあはれを知る」ことで、人間とはいかなるものなのか、ひいては自分の心を知ることなので、「人生如何に生くべきか」という「道」のことにつながっていくということだと考えた。また十九章に「歌の美しさがおのづから道の正しさを指すようになる」とあることからも、よい歌を詠むことは道を知ることにつながると言え、歌を学ぶことは古事記や日本書紀を読み道を学ぶことと質的に同じである、つながっているということかと考えた。

（振り返り）

広いテーマを扱ったので、まとめるのに苦労した。振り返って考えてみると「道とは何か」と「歌の事は道の事につながる」とはどういうことかについての発表であった。自分で調べてみて、本居宣長の、学問とは「人生如何に生くべきか」を考えることにあるというメッセージを体得した思いがした。なお、前述の通り、当日の配布資料（『本居宣長』での「道」の用例）は、「引用・参考文献」のところにあげておく。

3. 章 3 「本」と「末」について

（300 字質問）

「本」と「末」について

『本居宣長』十八章に出てくる、「本」と「末」という言葉について考えています。201 頁 2 行目に「歌ばかりを見て、いにしへの情を知るは末也。此物語を見て、さていにしへの歌をまなぶは、其古の歌のいできたるよしをよくしる故に、本が明らかになるなり」（201 頁 2 行目　「紫文要領」の引用）とあり、「情に流され無意識に傾く歌と、観察と意識とに赴く世語りとが離れようとして結ばれる機微が、ここに異常な力で捉えられている、と宣長は見た。彼が、末とか本とかいう言葉で言いたかった真意は、恐らく其処にある」（201 頁 5 行目～）と併せて考えると、「本」は、「観察と意識に赴く世語り」を読み、いにしへの風流人情を知り、ひいてはもののあはれを知ること、「末」

は詠まれた歌だけを見るような、本筋でないことを指すのでしょうか。

（当日の発表内容）

今回、十八章200頁の、「宣長は『源氏』を『歌物語』と呼んだが、これには彼独特の意味合いがあった。」という表現がまず気になったが、今回そこまで一気には辿りつけず、その次の段落に出てくる「本」と「末」の問題をまず考えることにした。

十八章では、源氏物語は本質的な意味での唯一の歌物語という前提に立ち、宣長が歌と物語がどんな風に結びついているのを見たか、ということが考察されている。201頁2行目から「紫文要領」の引用で、

> 歌ばかりを見て、いにしへの情を知るは末なり。この物語を見て、さていにしへの歌をまなぶは、其古の歌のいできたるよしをよく知る故に、本が明らかになるなり、彼はそういう風に見た。

とあり、この表現について201頁5行目から「情に流され無意識に傾く歌と、観察と意識に赴く世語りとが離れようとして結ばれる機微が、ここで異常な力で捉えれらている、と宣長は見た」と説明されている。

さらに9行目から「源氏」の内容は、歌の贈答が日常化し習慣化した人々の生活だが、作者はこれを見たままに写した風俗画家ではなかった。半ば無意識に生きられていた風俗のうちに入り込み、これを内から照明し、その意味を掴み出して見せた人だ、そこに、宣長は作者の「心映え」、作品の「本意」を見たとあるので、源氏物語は、半ば無意識に生きられていた当時の風俗を、紫式部が内部に入り込み観察し、意識化したものという風に理解した。

また、十三章140頁10行目に「個人の風儀人情を知らなければ、古歌はわからぬ」「個人の風儀人情を知るには『源氏』が最上の物語だ」という「紫文要領」の宣長の言葉が紹介された上でさらに、140頁最終行から同じく「紫文要領」からの引用で、

> 此もの語をよく見て、いにしへの中以上の人情風儀を、よくよく心得、その境界に、心をなして、さて其いにしへの歌をよく見てよむ歌は、かの細工人のもとへゆきて、作りやうを、くはしくまなび、とひききて、さてかの器物を見て、其かたにつくるがごとし、是、其のつくりやうの本をよく考えしりて、作れる故に、はじめのうつはとはかはることなし

とあり、このことから、「本」とは「いにしへの風儀人情を理解して歌を詠む」ようなあり方をいうのであり、さらに「いにしへの風儀人情」を知るのは、『源氏物語』が最上だと述べられていることも考え合わせると、「本」とは「観察と意識に赴く世語り」、つまり源氏物語を読んで、いにしへの中流以上の風儀人情を理解し、引いてはもののあはれを知ること、「末」は詠まれた歌だけを見るようなことにあたるのではないかと考えた。

しかし、「無意識に傾く歌」という表現についてはまだわからず、引き続き考えていきたい。

（振り返り）

発表に関してまだまだ不十分な点があることを池田先生からはご指摘いただいた（残念ながらその詳細が残っていないが、手元に残っているメモによると、「本」は基本で「末」は些末なことで、優劣の価値ではないとある）が、私自身は、発表の準備をすること自体が大変楽しいと思える内容であった。『源氏物語』を「歌物語」と捉える小林氏の視点と、それまで「あや」や「歌とは何か」を考えていたこととうまく結びついてきた感触が自分の中にあった。『源氏物語』を「めでたき器物」と表現するところも見事だと思った。

3. 章 4 「情」と「欲」について

この回の内容に関しては、池田雅延先生はじめ、池田塾の同人渋谷遼典氏等の手を借りて、校正作業を経、「小林秀雄に学ぶ塾　同人誌　好・信・楽」（http://kobayashihideo.jp 2017 年 10 月号）に掲載されており、それをまず転載する。

『本居宣長』自問自答
―「もののあはれを知る」と「あだなる」―

植田敦子

ここ数年、小林秀雄の『本居宣長』を読んでいるが、中でも『源氏物語』に関する叙述に惹かれている。今回は、その第十四章で言われている「『物のあはれを知る』と『あだなる』とは別事であるという宣長の答えは、『情』と『欲』との考えを混同してはならぬ、という考えの延長線上にある」（新潮社刊『小林秀雄全作品』第 27 集 154 頁 6 行）とはどのようなことを言っているのか、私なりに「情」と「欲」、および「物のあはれを知る」と「あだなる」ということを中心に考えてみた。

まず、「情」と「欲」とはどう違うのであろうか。

『小林秀雄全作品』第 27 集 152 頁に、宣長の「あしわけ小舟」からの引用がある。

> 欲バカリニシテ、情ニアヅカラヌ事アリ、欲ヨリシテ、情ニアヅカル事アリ。又情ヨリシテ、欲ニアヅカル事アリ。情バカリニシテ、欲ニアヅカラヌ事アリ。コノ内、歌ハ、情ヨリイヅルモノナレバ欲トハ別也。欲ヨリイヅル事モ、情ニアヅカレバ、歌アル也。サテ、ソノ欲ト情トノワカチハ、欲ハ、タダネガヒモトムル心ノミニテ、感慨ナシ、情ハ、モノニ感ジテ慨歎スルモノ也。恋ト云モノモ、モトハ欲ヨリイヅレドモ、フカク情ニワタルモノ也

宣長は、欲だけで情に関与しない事があり、欲から出て情に関与することがある、また情から出て欲に関与する事があり、情だけで欲に関与しないことがある、と言っている。

また、「欲はただ願い求める心だけで感慨がなく、情は、ものに感じて慨歎するもの」

ということなので、欲は「実生活の必要なり目的なりを追って、その為に、己を消費するもの」であり、自分の目的や欲求を達成しようとする心の動きや実行に移すことを指すと言える。

一方、情は、その特色はそれが「感慨」であるところにあり、153 頁 6 行目に、

「情」は己を顧み、「感慨」を生み出す。生み出された「感慨」は、自主的な意識の世界を形成する傾向があり、感動が認識を誘い、認識が感動を呼ぶ動きを重ねているうちに、豊かにもなり、深くもなり、遂に、「欲」の世界から抜け出て自立する喜びに育つのだが、喜びが、喜びに堪えず、その出口を物語という表現に求めるのも亦、全く自然な事だ。

とあるように、情は、「あはれ」という深い感慨を伴うもので、ものに感じて「あはれ」を認識していく、認識することによってまた「あはれ」を感じていくという心の動きが深まるうちに、「欲」の世界から抜け出て、「情」の段階に達することが「もののあはれを知る」ということで、その表出が歌であり、物語である、ということを言っているのだと考えた。

次に、「もののあはれを知る」と「あだなる」（「あだなる」は誠意がなく浮気であるようなあり方）とは別事である、ということに関してであるが、まず 153 頁に『紫文要領』からの引用があり、質問者と宣長との問答が紹介されている。

物語は教誡の書ではないのであるから、「儒仏の道」や「尋常の了簡」からすると善悪の評価にはあずからぬものだ。「ただ人情の有りのままを書しるして、みる人に、人の情はかくのごとき物ぞ」といふ事を知らする也、是物の哀れをしらする也」、それが物語の道であるという説は承知したが、それならば、紫式部の本意は、「物のあはれしるを、よき人とし、しらぬを、あしき人とす」という事になる筈だが、それがよく合点出来ないと質問者は言う。何故かというと、「源氏」の「巻巻に、ひたすらあだなるを、あしき事にいひ、まめなるを、ほめたる心ばへのみ見えて、あだなる人を、よしとする心は見えず、いかが」宣長答えて言う、「あだなるをよしとするとは、たれかはいへる。あだなるを、いましむるは、尋常の論はさらにもいはず、物語にてもいはば、あだなるは、物の哀しらぬにちかし。されば、いかでそれをよしとはせむ。まへにもいへる如く、物のあはれをしると、あだなるは別の事にて、たがひにあずからぬ事也、但し、物語の本意は、まめなるとあだなるとは緊要にあらず。もののあはれをしるとしらぬが、よしあしの緊要関鍵なり。

つまり、「もののあはれをしる」と「あだなる」こととを質問者は混同していて、例えば『源氏物語』に描かれた様々な恋愛の事象を、一般の読者は「あだなる」と捉え、それと「もののあはれ」を直結して考えていることに宣長は異議を唱えているのであろう。

156 頁からは「夕霧」の巻が紹介され、

物の哀をば、いかにも深くしりて、さて、あだあだしからぬやうにたもつを、よきほどといふ也。物の哀をしればとて、あだなるべき物にもあらず、しらねばとて実（まめ）なるべき物にもあらず。されど、そこをよくたもつ人はなきものにて、物の哀をしり過れば、あだなるが多きゆへに、かくいへる也。

とあるように、「物の哀れを知り過ぎれば、あだなることが多くなるため、そのような誤解が生じる」とも宣長は述べている。

「帚木」の巻の雨夜の品定めで、「あだなる」と「まめなる」を男たちは話題にしている、しかし、源氏は、居眠りをしていて、人々の話に無関心で、藤壺の人柄を一人思っている。

世間というものは、物事のよしあしを「まめなる」か「あだなる」かによって区分けしようとする。しかもその評価の基準を物語の世界にも持ち込んでくる。だが宣長は、物語というものは「まめなる」か「あだなる」かの議論をしようとするものではない、「もののあはれ」というものを事細かに描こうとするものなのだ、と言う。

「あだなる」ことであれ「まめなる」ことであれ、いずれにもせよそこにある「情」や「もののあはれを知る」心の在りかたを描くことが「物語の本意（本質）」であり、宣長は、『源氏物語』は人間がさまざまな局面、出来事で感じる「あはれ」を物語という形に調えることにより、人間とはどういうものか、人の心とはどういうものか、ということを表現しているということを言いたかったのである。

当時は『源氏物語』に対して、様々な恋愛事情を描いて人間の欲や「あだなる」様相を肯定、あるいは奨励すらしているという誤解がおそらく多く、それに対する宣長の反論という意味も大きかったのではないだろうか。『本居宣長』の引用文を通して、宣長が生きた時代に一般の人々が『源氏物語』に抱いていた評価と、それに対して「もののあはれ」が描かれている、という新しい評価軸を打ち出した宣長の思想との対比を改めて確認することができた。

（了）

次に、2017年の発表時の原稿にほぼ近いものを以下参考までに掲載する。

（発表時の原稿　改訂有）

「『物のあはれを知ると『あだなる』とは別事であるという宣長の答えは、「情」と「欲」との考えを混同してはならぬ、という考えの延長線上にある」という小林秀雄氏の指摘が気になり、まず、「情」と「欲」について考えた。

(1)「情」と「欲」について

14章152頁13行目の「宣長は、情とよくとは異なるものだ、と言っている」の後に「あしわけ小舟」の引用がある。

欲ばかりにして、情にあづからぬ事あり、欲よりして、情にあずかることあり。

又情よりして、欲にあずかる事あり。情ばかりにして、欲にあずからぬことあり。この内、歌は、情よりいづるものなれば、欲とは別なり。欲よりいづる事も、情にあづかれば、歌あるなり。さて、その欲と情とのわかちは、欲は、ただねがひもとむる心のみにて感慨なし、情は、ものに感じて慨歎するものなり。恋というものも、もとは欲よりいづれども、ふかく情にわたるものなり」（あしわけをぶね）

宣長は、情と欲とを異なるものとして区別しており、

欲だけで情に関与しない事があり、欲から出て情に関与することがある。

また情から出て欲に関与する事がある。情だけで欲に関与しないことがある。

歌は情から生まれ出るもので、欲から出た事も情があれば歌が生まれる、

と言っている。

また、「欲はただ願い求める心だけで感慨がなく、情は、ものに感じて慨歎するもの」ということなので、153 頁 5 行目に書いてあるように、

欲は「実生活の必要なり目的なりを追って、その為に、己を消費するもの」

であり、つまり、欲は自分の目的や欲求を達成しようとする心の動きや実行に移すことを指すのであろう。

一方、情は、その特色はそれが「感慨」であるところにあり、

本文 153 頁 6 行目に

「情」は己を顧み、「感慨」を生み出す。生み出された「感慨」は、自主的な意識の世界を形成する傾向があり、感動が認識を誘い、認識が感動を呼ぶ動きを重ねているうちに、豊かにもなり、深くもなり、遂に、「欲」の世界から抜け出て自立する喜びに育つのだが、喜びが、喜びに堪えず、その出口を物語という表現に求めるのも亦、全く自然な事だ」

とあり、情は、「あはれ」という深い感慨を伴うもので、欲より上位にある心の動きあり、本文の「「あはれ」という感動が認識を誘い、認識が感動を呼ぶ動きを重ねているうちに」というのは（実はよくわからなかった部分であるが）、ものに感じて「あはれ」を認識していく、認識することによってまた「あはれ」を感じていくという心の動きが深まるうちに、「欲」の世界から抜け出て、「情」の段階に達することが「もののあはれを知る」ということで、その表出が歌であり、物語である　ということを言っているのだと考えた。

(2)「もののあはれを知る」と「あだなる」

次に、「もののあはれを知る」と「あだなる」とは別事である、ということに関して考察する。153 頁に 12 行目から「紫文要領」からの引用があり、

物語は教戒の書ではないのであるから、「儒仏の道」や「尋常の了簡」からすると善悪の評価にはあずからぬものだ。「ただ人情のありのままを書しるして、みる人に、人の情はかくのごとき物ぞ」といふことを知らする也、是もののあはれをしらする也」、それが物語の道であるという説は承知したが、それならば、紫式部の本意は、「もののあはれをしるをよき人とし、しらぬを、あしき人とす」

という事になる筈だが、それがよく合点できないと質問者は言う。何故かというと、「源氏」の「巻巻に、ひたすらあだなるを、あしき事にいひ、まめなるを、ほめたる心ばへのみ見えて、あだなる人を、よしとする心は見えず、いかが」宣長答えて言う、「あだなるをよしとするとは、たれかはいえる。あだなるを、いましむるは、尋常の論はさらにもいはず、物語にてもいはば、あだなるは、物の哀しらぬにちかし。されば、いかでそれをよしとはせむ。まへにもいへる如く、物のあはれをしると、あだなるは別事にて、たがひにあずからぬ事なり、ただし、物語の本意は、まめなるとあだなるは緊要にあらず。もののあはれをしるとしらぬが、よしあしの緊要関鍵なり。」

質問者は、「ただ人情をありのまま記して、みる人に、人の情はこのようなものだ」ということをしらせるのがもののあはれをしらせること」でそれが「物語の道」であるということはわかったが、それならば式部の本意は「もののあはれをしるのをよき人とし、しらないのをあしき人とする」ということになる筈だが、それがよく理解できない、その理由として「『源氏物語』では「あだなる」をあしきことにいい、「まめなる」をほめている心映えばかりが見える。あだなる人をよしとする心は見えない」と言っていて、それに対し宣長は、「あだなるをよしとしているのではない。あだなるは物のあはれをしらないのに近い。物のあはれをしるとあだなるは別の事で、互いにあずからぬ事だ。物語で「あだなる」か「まめなる」かが大事なのではなく、「もののあはれをしるかしらないかが大事」と述べている。

つまり、「もののあはれをしる」とは「あだなる」ことと質問者は混同していて、例えば源氏物語に描かれた様々な恋愛の事象を、一般の読者は「あだなる」と捉え、それと「もののあはれ」を直結して考えていることに宣長は異議を唱えているのである。

実際、156 頁から「夕霧」の巻を紹介し、157 頁 10 行目から

物の哀をば、いかにも深く知りて、さて、あだあだしからぬやうに保つを、よきほどという也。物の哀れをしればとて、あだなるべき物にもあらず、しらねばとて実（まめ）なるべき物にもあらず。されど、それをよく保つ人はなきものにて、物の哀をしり過ぎれば、あだなるが多きゆへにかくいへるなり」

とあるように、「あだなる」か「まめなるか」は「もののあはれをしる」ことと直接には関係しない、「物の哀れを知り過ぎれば、あだなることが多くなるため、そのような誤解が生じる」と宣長は「紫文要領」で述べている。

155 頁 4 行目からの雨夜の品定めで「あだなる」と「まめなる」を男たちは話題にしていて、しかし、源氏は、居眠りをしていて、人々の話に無関心で、藤壺の人柄を

一人思っている　というところがまさに、「もののあはれ」が本意なのに、「まめなる」や「あだなる」という事象に気を取られていることを表していると感じた。

「あだなる」こと（注によると、誠意がなく浮気であるようなあり方は）宣長によって否定されていて、むしろそこにある、「情」や「もののあはれを知る」心の在りかたを描くことが「物語の本意（本質）」で、宣長は、『源氏物語』は人間がさまざまな局面、出来事で感じる「あはれ」を物語という形に整えることにより、人間とはどういうものか、人の心とはどういうものか、ということを表現している物語である、ということを言いたかったのであり、また、当時『源氏物語』に対して、様々な恋愛事情を描き、人間の欲や「あだなる」様相を表しているという誤解がおそらく多く、それに対する宣長の反論という意味も大きかったのではないかと考えた。

(3)「延長線上にある」

最後に「延長線上にある」という表現についてであるが、宣長が「紫文要領」で「もののあはれをしる」ことと「あだなる」が別の事であるといっているのは、宣長の初期の歌論である「あしわけ小舟」で述べられている「情」と「欲」との考えを混同してはならないという考えを発展させたものである、ということで、つまり、「情」は「あはれ」に通ずるもので、「欲」を行動に移すことが「あだなる」事とみることもできる。また、「延長線上」という言い方をしているのは、「情」と「あはれ」、「欲」と「あだなる」のそれぞれの性質的類似だけでなく、「あしわけ小舟」から「紫文要領」に至る宣長の思想的変遷をも意識した表現だと考えた。

(4) 振り返り

今回の発表に関しては、池田雅延先生からお褒めの言葉をいただき、また内容的にも達成感があった。web 原稿に改める際に、池田先生にはたくさんのご助言をいただき、発表時に比してより本質的な部分を掲載することができた。

4. まとめ

すでに発表原稿を失くして採録できないものもあったが、このようにまとめてみると、改めて自分が歌への関心が高いことがうかがえた。それはさらに、『源氏物語』を「歌物語」と捉える十三章の内容に関する発表を経て、『源氏物語』への言及部分に現在関心が向かっている。小林秀雄は『本居宣長』を十二年かけて執筆し、その関心も『源氏物語』から『古事記』に移行していったようである。私自身も、『源氏物語』にある程度目途がついたら、『古事記』への言及箇所にあたって今後学びを深めていきたい。

なお、この勉強会「小林秀雄に学ぶ塾」（通称 池田塾）は茂木健一郎氏が発足され、ご厚意で小林秀雄の旧家（鎌倉、雪ノ下）で行うことができ、また小林秀雄の担当編集者池田雅延氏に直々にご指導いただいている。ここに両者に深い感謝の意を申し上げたい。

引用・参考文献

1）今回、『本居宣長』（小林秀雄著）の引用はすべて『本居宣長全作品集 27　本居宣長〈上〉』（新潮社　2004 年 12 月 10 日発行　1～31 章収録）、及び『本居宣長全作品集 28　本居宣長　下』（新潮社　2005 年 1 月 10 日発行　32～50 章収録）から行った。

2）参考資料に載せた「石上私淑言」は、『排蘆小船・石上私淑言――宣長「物のあはれ」歌論』（岩波書店　2003 年 3 月 14 日発行）による。

3）次頁より、発表当日配布した資料を転載する。

〈文〉『本居宣長』での用例　他

「あゝはれ―あはれ」
生まの感動の声 → 声を長く引く
文をなす

二十三

P258

「歌」「詠」の字は、古来「うたふ」「ながむる」と訓じられて来たが、宣長の訓詁によれば、「うたふ」も「ながむる」も、もともと声を長く引くという同義の言葉である。「あしわけ小舟」にあるこの考えは、「石上私淑言」になると、更にくわしくなり、これに「なげく」が加わる。「なげく」も「長息」を意味する「なげき」の活用形であり、「うたふ」「ながむる」と元来同義なのである。

ℓ6 「あゝ、はれ――あはれ」という生まの感動の声は、この声を「なげく」「ながむる」事によって、歌になる。言うまでもなく、歌の本質を、そんな所に求めた歌学者はなかったので、これがわかりにくい考えである事は、宣長自身も承知していた。「あしわけ小舟」を整理した「石上私淑言」も問答体に書かれているが、その中でも、この考えを容易に納得しない「問者」を設けて説いている。

歌を、何もむつかしく定義しなくてもよい、あわれにたえ難い時に、「其思ふすぢを、おぼえずいひいづる」のが歌だ、という御意見は尤もだとしても、そう言って了

ℓ13 えば、それは「たゞの詞にても有ぬべき事」だし、特に歌は「声を長くし、詞に文をなす」と言うのが心得難い、と言う問者に、宣長は、「今の人の心にては、此疑さる事也」と言って、次のように説明する。「今、目にちかく有〻事を、引ていはば、今、

P259

人せちに物のかなしき事有て、堪がたからんに、そのかなしきすぢを、つぶ〳〵といひつゞけても、猶たへがたさの、やむべくもあらず。又ひたぶるに、かなし〳〵と、たゞの詞に、いひ出ても、猶かなしさの忍びがたく、たへがたきときは、おぼえずしらず、声をさゝげて、あらかなしや、なふ〳〵と、長くよばゝりて、むねにせまるかなしさをはらす、其時の詞は、をのづから、ほどよく文ありて、其声長くうたふに似

ℓ5 たる事ある物也。これすなはち歌のかたち也。たゞの詞とは、必異なる物にして、その自然の詞のあや、声の長きところに、そこゐなきあはれの深さは、あらはるゝ也。

ℓ8 かくのごとく、物のあはれに、たへぬところより、ほころび出て、をのづから文ある辞が、歌の根本にして、真の歌也」（「石上私淑言」巻一）

そこゐなき　底知れない、限りない。「そこゐ」はきわめて深い底。

文中に、明らかに透けて見えて来るのは、「たゞの詞」より、発生的には、「歌」が

ℓ10 先きだという考え、「歌」よりも、声の調子や抑揚の整う事が先きだという考えだ。彼のこの大胆な直観には注目すべきものがある。右の文中で、「たゞの詞」という言葉の概念が曖昧なのは、問者の「今の人の心」からの曖昧な問いをそのまま受けている

ℓ14 からであり、そんな事にこだわるより、「たゞの詞とは、必異なる物」というその「物」が、「歌のかたち」と呼ばれている事に注意する方がよい。宣長に言わせれば、歌とは、先ず何を措いても、「かたち」なのだ。或は「文」とも「姿」とも呼ばれている瞭然たる表現性なのだ。歌は、そういう「物」として誕生したという宣長の考えは、まことにはっきりしているのである。発達した歌の形式に慣れた「今の人の心」には、先ず「たゞの詞」があり、それから「たゞの詞」を「文」によって装飾する歌

P260

ℓ1 という技芸が発達したという通念がある。宣長の徹底した考えは、先ずこの通念と衝突せざるを得ないのである。

（中略）

P261

ℓ2 言語表現というものを逆上って行けば、「歌」と「たゞの詞」との対立はおろか、そのけじめさえ現れぬ以前に、音声をととのえるところから、「ほころび出る純粋な「あや」としての言語を摑むことが出来るだろう。この心の経験の発見が、即ち「うたふ」という言葉の発明なら、歌とは言語の粋ではないか、というのが宣長の考えなのである。

植田敦子

P263

もよいと思う。堪え難い悲しみを、行動や分別のうちに忘れる便法を、歌道は知らない。悲しみを、そっくり受納れて、これを「なげく」という一と筋、悲しみを感ずるその感じ方の工夫という一と筋を行く。誰の実情も、訓練され、馴致されなければ、その人のはっきりした所有物にはならない。わが物として、その「かたち」を「つく〳〵と見る」事が出来る対象とはならない。私達が理解している「意識」という言葉と、宣長が使った意味合での「物」という言葉とを使って、こう言ってみてもよさそうだ、歌とは、意識が出会う最初の物だ、と。そう言いたかった宣長を想像してみてもよいであろう。

ここで、もう一つ、「あしわけ小舟」から引用して置こう。「カナシミツヨケレバ、ヲノヅカラ、声ニ文アルモノ也。ソノ文ト云ハ、哭声ノ、ヲヽイ〳〵ト云ニ、文アル也。コレ巧ミト云ホドノ事ニハアラネド、又自然ノミニモアラズ、ソノヲヽイ〳〵ニ、文ツケテ、哭クニテ、心中ノ悲シミヲ、発スル事也。モトヨリ、外カラ聞ク人ノ心ニハ、ソノ悲シミ、大キニフカク感ズル也。カヤウノ事ハ、愚カナル事ノヤウナレドモ、サニ非ズ。サレバ、モロコシニテ、喪ノ時ニ哭スル礼ノ定マリタルモ、仮令ノ事ノヤウナレドモ、モト実情ヲ導クシカタ、聖人ノ智ハ、フカキモノ也」

実利実用に繋がる諸制度に慣れた人々は、礼というものをややもすれば贅物と考え易い。内容を欠いた、便宜的な、外的規制と見勝ちだが、それは浅薄な考えであって、そういう人達が「愚カナル事」「仮令ノ事」と見るところに、却って礼の本質的なものが顔を出している。礼と歌とは、その発生に立合う気になって考えれば、区別のつ

P264

きにくい双生児のような顔附きをしている。無くてはどうしても適わぬ人間の印しのように、私達の内部から生れて来るものだ。本を尋ねて、考えようとすれば、そういう事が解って来る。礼を言えば楽*を言った聖人の智は、その点で深いものだ、と宣長は言うのである。

突き詰めて行けば、礼とは、「実情ヲ導ク」その「シカタ」だと彼は言う。それなら、これは言葉なき歌とも言えるわけだ。私達は、この「シカタ」を何によって思い附くのでもなく、何処から借りて来るのでもない。それは実情自体から「ヲノヅカラ」「ほころび出」る。もう少し精しく言えば、「巧ミト云ホドノ事ニハアラネド、又自然ノミニモアラズ」という具合に生れて来る、と宣長は考える。私達は、意識して自発的にそうするのでもなければ、無意識に事の成行きに従うのでもない。人間の構造は、そのような出来だ、と彼は言っていると解してよかろう。

誰も、各自の心身を吹き荒れる実情の嵐の静まるのを待つ。叫びが歌声になり、震えが舞踏になるのを待つのである。例えば悲しみを堪え難いと思うのも、裏を返せば、これに堪えたい、その「カタチ」を見定めたいと願っている事だとも言えよう。捕えどころのない悲しみの嵐が、おのずから文ある声の「カタチ」となって捕えられる。宣長に言わせれば、この「カタチ」は、悲しみが己れを導くその「シカタ」を語る。更に言えば、「シカタ」しか語らぬ純粋な表現性なのである。この模倣も利き、繰返しも出来る、悲しみのモデルとでも言っていいものに出会うという事が、各自の内部に起る。私達は、誰もその意味合を問う前に、先ずこの悲しみの型を信じ、これを演

P265

ずる俳優だったと言ってもよかろう。もし、そうでなければ、喪という共通の悲しみを予感し、己れの悲しみを発し、これを相手と分つ道が、どうして開かれるであろう。礼は聖人の智慧の発明ではない。そう見抜いていたのが聖人の智慧だ、と宣長は言うのである。

ℓ7 ℓ9 ℓ14 ℓ5 ℓ13

喪ノ時ニ哭スル礼　死をとむらう礼儀として、声をあげて泣き悲しむこと。

仮令　かりそめ。

楽　音による技芸。音楽。たとえば「論語」〈八佾篇〉に、「人にして仁ならずんば、礼を如何にせん。人にして仁ならずんば楽を如何にせん」とある。

本居宣長

文に関する記述

ある人問ひていはく、歌とはいかなる物をいふぞや。まろ答へていはく、ひろくいへば卅一字の歌のたぐひを始めとして、一神楽歌、二催馬楽、連歌、三今様、四風俗、平家物語、猿楽のうたひ物、今の世の狂歌、俳諧、小歌、浄瑠理、わらはべのうたふはやり歌、臼つき歌、木びき歌のたぐひ迄、詞の程よくとゝのひ文ありてうたはるゝ物はみな歌也。この中に古今雅俗のけぢめはあれども、こと〳〵く歌にあらずといふ事なし。

（中略）

人のみにもあらず、禽獣に至るまで、有情のものはみな其声に歌ある也。五古今集の序に、花になく鶯、水にすむ蛙の声をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりけるといへるをみるべし。鳥虫なども、其鳴声の程よくとゝのひておのづからあやあるはみな歌也。しかるを鶯蛙の歌とて卅一字の歌を伝へたるは、古今の序の詞によりて、好事の者の作りたる也。禽獣はいかでか人の歌をよむことあらむ。鶯は鶯、蛙は蛙、おのがじゝ鳴声のあやあるを、それが歌とはいふ也。されば此世にいきとしいける物は、みなおの〳〵其歌ある也。

（中略）

問ひて云はく、詞のほどよくとゝのひて文あるとは、いかなるをいふぞ。答へて云はく、うたふに詞のかず程よくてとゞこほらず、おもしろく聞こゆる也。あや有るとは、詞のよくとゝのひそろひてみだれぬ事也。大方五言・七言にとゝのひたるが、古今雅俗にわたりて程よき也。さればむかしの歌も、今のはやり小歌も、みな五言・七言也。是自然の妙也。上代の歌は文字の数も定まらずといへるは誤り也。神代の歌といへども、五言と七言とにもるゝ事なし。

（中略）

神代の歌もみな程よくとゝのひてあや有る也。五七の調にもれざるべし。かの下照姫の歌は、殊に其詞程よくとゝのひてうるはしくきこえたり。もし其文字の数定まらざれば、うたふに其詞とゞこほりみだれて、耳にさはりて聞きよからぬ也。今のはやり小歌のたぐひも又しか也。これ人のよくしる所也。上代の歌は其よめる時に即ちうたふ故に、うたひて詞とゝのへば、三言にもあれ、四言・六言・八言にもあれ、みな五言・七言の詞にさへうたへば、字のたらぬとあまるとはかゝはらざりし也。それもあまりてもよき所、たらでもよき所、あまりてはあしき所、たらではあしき所あるべし。みなうたふ時にしるゝ事也。猶五言・七言にとゝのふる事は、下にくはしくいふべし。詞の程よくとゝのひあやあるとは、かくの如きをいふ也。禽獣のなくこゑも是になぞらへてしるべし。五言・七言は人の詞の程よき也。鳥虫などもそれ〴〵に、其声の程よき所の有るものにて、それが即ちその物の歌也。

（中略）

問ひて云はく、たへがたき時に、其思ふすぢを覚えずいひ出づるはさることなるべし。それはたゞの詞にても有りぬべき事なるを、声を長くし、詞に文をなすとは心得がたし。此義いかゞ。答へて云はく、今の人の心にては此疑さる事なり。すべて万の事、其本をたづねて、よく〳〵そのあぢはひを考ふべし。末の心をもて見れば、うたがはしき事多き物なれば、其本の心になりてあぢはふべし。まづ歌といふ物のおこる所は右の如し。それをただの詞にいはずして声を長くし、詞にあやをなすことも、たくみて然するにはあらず、たへがたき事をいひ出づるは、おのづから詞にあや有りて長くひかるゝ物なり。

「文」(3)

それをたゞの詞にいふは、あはれの浅き時の事也。深き時は自然と文有りて長くいはるゝ也。深きあはれは、たゞの詞にいひてはあきたらず、同じ一言も長くあやをなしていへば、心はるゝ事こよなし。たゞの詞にては、いかほど長くこま〳〵といひてもいひつくされぬ深き情も、詞にあやをなして長くうたへば、其詞の文、声の文によりて情の深さもあらはさるゝ物也。されば其詞のほどよく文有りて長き所に、無量無窮の深きあはれはこもりて有る物也。それを聞く人も、たゞの詞にていふをきゝては、いか程あはれなるすぢをきゝても感ずる事浅し。それを詞にあやなし、声を長くしてうたふ時は、きく人のあはれと感ずる事もこよなう深し。これみな歌の自然の妙也。鬼神のあはれと思ふ所もこゝにあるなり。

かやうにいひても猶、物遠きこゝちして心得がたく思ふ人有るべし。今目にちかく有る事を引きていはゞ、「今人せちに物のかなしき事有りて堪へがたからむに、其かなしき筋をつぶ〳〵といひつゞけても、猶たへがたさのやむべくもあらず。又ひたぶるにかなし〳〵と、たゞの詞にいひ出でても猶かなしさの忍びがたくたへがたき時は、覚えずしらず、声をさゝげて、あらかなしやなふ〳〵と長くよばゝりて、むねにせまるかなしさをはらす。其時の詞は、おのづからほどよく文有りて、其声長くうたふに似たる事有る物也。是則ち歌のかたち也。たゞの詞とは必ず異なる物にして、其自然の詞のあや、声の長き所に、そこひなきあはれの深さはあらはるゝ也。かくの如く物のあはれにたへぬところよりほころび出でて、おのづから文ある辞が、歌の根本にして真の歌也。」さて又右のやうに覚えずしてふとほころび出づるにはあらで、よまむとおもひてよみ出づる事もあり。それも本は物のあはれにたへぬ時のわざ也。

其詞に文をなし、声をほどよく長めてうたふが歌の本然にして、神代よりしかある事也。これを聞く人感とおもへば、こなたの心もはるゝ事こよなし。聞く人感と思はざれば、こなたの心のぶる事すくなし。是自然の事也。今世の中にある事に引きあてゝ心得べし。心にあまる事を人にいひきかせても、其人あはれとおもはざれば何のかひなし。あはれときかるればこそ、心はなぐさむわざなれ。されば歌は人のきゝて感と思ふ所が緊要也。此故に神代の歌とても、思ふ心のありのまゝにはよまず。必ずことばを文なして、声おかしくあはれにうたへる物也。妻といはむとてはまづ若草のといひ、夜といはむとてはぬば玉のとうち出づるたぐひなどみな、詞を文にして詞をほどよくとゝのへむためならずや。後には、

敷嶋のやまとにはあらぬ唐衣ころも経ずしてあふよしもがな

みかの原わきて流るゝいづみ川いつ見きとてかこひしかるらむ

よそにのみ見てややみなむ葛城やたかまの山のみねのしら雪

これらおもふ心をばたゞ二句にいひて、のこり三句はみな詞の文也。さればいらぬ物のやうにおもふ人有るべけれど、無用の詞のあやによりて、二句のあはれがこよなく深くなる也。万葉集に此たぐひことに多し。すべてたゞのことばと歌とのかはりはこれ也。

たゞの詞は其意をつぶ〳〵といひつゞけて、ことわりはこまかに聞こゆれども、猶いふにいはれぬ情のあはれは、歌ならではのべがたし。其いふにいはれぬあはれの深きところの歌にのべあらはさるゝは何ゆゑぞといふに、詞にあやをなす故也。其あやによりてかぎりなきあはれもあらはるゝ也。

（石上私淑言。岩波文庫より）

※日本居宣長『上』
P 258 ～ 259
31 用 部分に

「文」(4)

『本居宣長』「道」の用例　※宣長の「道」、「道の事」の「道」の用例を中心に

二〇一五・一・一七　植田敦子

《小林秀雄全作品２７》

六章契沖→宣長

・詠歌の所見について、契沖はまだ明言していないが、真淵の影響で、歌道が古道の形に発展した宣長にとっては、もうはっきりした発言になる。（Ｐ７２・Ｌ７）

「すべて人は、かならず歌をよむべきものなる内にも、学問をする者は、なほさらよまではかなはぬはぬわざ也、歌を詠までは、古への世のくわしき意、風雅のおもむきはしりがたし」「～みずからよむになりては、我が事なる故に、心を用いること格別にて、深き意味を知ること也、さればこそ師（真淵）もみずから古風の歌をよみ、古ぶりの文をつくれとは、教えられたるなれ」（うひ山ふみ）

・宣長は、契沖から歌学に関する蒙を開かれたのではない、凡そ、学問とは何か、学者として生きる道とは何か、という問いが歌学になった契沖という人に、出会ったというところが根本なのである。（Ｐ７７・Ｌ１）

十章仁斎や徂徠の「道」

◎言うまでもなく、彼らの学問は、当時の言葉で言えば、「道学」であり、従って道とは何かという問いで、彼らの精神は、卓然として緊張していたと見てよいわけであり、そこから生れた彼らの歴史意識も、この緊張で着色されていた。（Ｐ１１２・Ｌ１６）

◎学問とは物知りに至る道ではない、己を知る道である。

・卑近なるもの、人間らしいもの、俗なるものに、道を求めなければならないとは、宣長にとっては、安心のいく、尤もな考え方ではなかった。

十一章仁斎や徂徠の「道」→宣長の「道」◎

◎宣長が求めたものは、如何に生くべきかという「道」であった。（Ｐ１２５・Ｌ１２）

彼は「聖学」を求めて、出来る限りの「雑学」をして来たのである。彼は、どんな「道」も拒まなかったが、他人の説く「道」を自分の「道」とすることは出来なかった。（Ｐ１２５・Ｌ１４）

◎学問とは物知りに至る道ではない、己を知る道であるとは、恐らく宣長のような天才には、殆ど本能的に掴まれていたのである。彼には、周囲の雰囲気など、実はどうでもいいものであった。卑近なるもの、人間らしいもの、俗なるものに道を求めなければならないとは、宣長にとっては、安心のいく、尤もな考え方ではなかった。（Ｐ１２７・Ｌ１１）

十二章

◎「おのれは、道の事も歌の事も、あがたぬのうしの教のおもむきによりて、ただいにしえの書共を、かむがえさとれるのみこそあれ、其家の伝えごととては、うけつたへたること、されになければ、家々のひめごとなどいふかぎりは、いかなる物にか、一つだにしれることなし。～」（「玉勝間」）（Ｐ１２８・Ｌ２）

・もし歌の道というものがあるならば、名歌は歌の道を踏んではいようが、歌の道について語りはしまい。「源氏」という名物語は、その自在な表現力によって、物語の道も同時に語った。物語の道という形で、歌の道とは何かと問う宣長に答えた。

・「問　和歌の道は本邦の大道也と云事いかが、答、非なり、大道と云は、儒は聖人の道を以て大道とし、釈氏は仏道を大道とし、老荘は道徳自然にしたがふを大道とし、それぞれに、我が道を以て大道とす、我邦の大道と云ふ時は、自然の神道あり、これ也、自然の神道は、天地開闢神代よりある所の道なり、～」（「あしわけをぶね」）（Ｐ１３２・１７Ｌ）

「道」用例（2）

十四章 源氏、もののあはれと「道」

・宣長が考えていたのは、彼が「物語の本意」と認めた「物のあはれを知る」という「道」である。個々の経験に与えられた、心情の動き、「あだなる」動きも、「実なる」動きも「道」を語りはしない。宣長は、「道」という言葉で、先駆的な原理の如きものを、考えていたわけではなかったが、個々の心情の経験に脈絡をつけ、或る一定の意味に結び、意識された生き方の軌道に乗せる、基本的な、或いは純粋な、と呼んでいい経験は、思い描かざるを得なかったのである。これは、「道」を考える以上、当然、彼に要請されている事であった。（P154・9L）

十五章 同前

・そういう次第で、宣長の論述を、その起伏に逆らわず、その抑揚に即して辿って行けば、「物の哀をしる」という言葉の持つ、「道」とも呼ぶべき性格が、はっきり浮かびあがって来る。（P159・L1　冒頭）

十六章 同前

・ここで言われている「日本紀」とは、無論、やがて六国史となる正史、「紀」でもあり、「道」でもある「日本書紀」を指す。（P181・L16）

十九章 宣長　歌のまなび→道のまなびへ

・「又道の学びは、まづはじめより、神書というすぢの物、ふるき近き」、なかりしに

◎宣長は「源氏」による「歌まなび」の仕事が完了すると、直ちに「古事記伝」を起草し、「道のまなび」の仕事に没入する。（P213・L8）

◎彼の回想文のなだらかに流れるような文体は、彼の学問が「歌まなび」から「道のまなび」に極めて自然に成長した姿であり、歌の美しさが、おのづから道の正しさを指すようになる、彼の学問の内的必然の律動を伝えるであろう。「歌まなび」と「道のまなび」との二つの観念の間に、宣長にとって飛躍や矛盾は考えられていなかった。（P213・15）

・（真淵の冠辞考が）「歌まなび」から「道のまなび」に転ずるきっかけを作った（P213・L10）

二十五章

・その「やまとだましひ」とは、「神代上代のもろもろの事跡のうへに備はりた」る、「皇国の道」「人の道」を体した心という意味である。（P282・L1）

・宣長の正面切った古道に関する説としては、「直毘霊」が最初であり、又、これに尽きてもいる。「直毘霊」は、今日私たちが見るように、「此篇は、道ということの論ひなり」という註が附けられていて、古事記伝の総論の一部に組み込まれているものだが、論いなど何処にもない。（P282・L12）

◎宣長の解く古道の説というものは、特に道を立てて、道を説くということが全くなかったところに、我が国の最初の古道があったという逆説の上に成り立っていた。（P282・L16）

《小林秀雄全作品28》

三十三章 孔子、徂徠、宣長

◎宣長の学問でも、「主としてよるべきすぢ」は道であったが、「其道は、もろもろの事跡のうへに備はりたり、この二典の上代の巻巻を繰り返しくりかえしよく読み見るべし」（「うひ山ぶみ」という。道の学問の目指すところを、一口で言うなら、そういう歴史的事実を学び明らめるところにある。（P32・L6）

◎ところで、「直毘霊」には、「古への大御世には、道という言挙げもさらになかりき、其はた

だ物にゆく道こそ有りけれ、物のことわりあるべきすべ、万の教へごとをしも、何の道くれの道といふことは、異国のさだなり」とあるが、こういう文章にしても、やはり徂徠の「物は教への条件也」という強い考えが、その骨格を成していると言えば、言える。（P３３・L１８）

◎直毘霊は、「古事記伝、一の巻」の最後の項目を為すもので、「道ということの論ひ」の別題を持つ。宣長は、これを別本にして、世に問うたが、学界を納得させる事は、思いも寄らなかった。「神皇（スメロギ）の道」というような全く聞き慣れぬ言葉が、先ず、「聖人の道」という通念に、歯の立ちようがなかった。しかし、問題の本質的な困難は、「受行ふべき道なき」を道とする「神の道」が「道ということの論ひ」で説明がつくわけがないというところにあった。（P３６・最終行）

三十七章

◎「直毘霊」が、「道といふことの論ひ」であるのに対し、「玉鉾百首」は、道ということの歌であるわけだが、「直毘霊」の註解風なものでも、と考えると、それは、おのづから歌の形を取った、恐らくそういう事であった。「直毘霊」を、「道といふことの論ひ」と、宣長自身呼んではみたが（「古事記伝」一之巻）、彼が其処で実際に当面した「道といふこと」は、論おうにも論いようもない、「神代の古事」であった。「古事記」という「まそみの鏡」の面に、うつし出された、「よく見よ」と言うより他はない「上つ代の形」であった。「古典ども」に現れた生活には、「何の道くれの道」というような、「道という言挙げ」はさらになかったのだし、道といえば、「味御路（うましみち）」と言われた、「ただ物にゆく道」があっただけで、その他に道というものは考えられていなかった。それで、秩序ある社会生活を営むのに、何の仔細もなかった。のみならず、その事についての明らかな自覚があった事は、「神ながら言挙げせぬ国」という古語（ふること）が使われていた事で、知られるのである。（下・P６４・最終行）

◎そういう次第で、明らかに、宣長の歌学の中心にあった「物のあはれを知る心」が、「道」の学問では、そのまま「人のまごころ」となるのである。「物学び」に於ける「歌の事」と「道の事」との緊密な関係は、彼が早くから考えていたところで、「あしわけをぶね」で、既にこの問題に触れている。一（儒は身を修め家をととのへ、天下ををさむるの大道也、仏はまよひをとき、悟りをひらき、凡夫をはなれ、成仏するの大道也、カクノゴトク心得る時は）皆、「それぞれに我道を以て大道」としている事になるが、その意味で「和歌は、鬱情をハラシ、思ひをのべ、四時のありさまを形容する大道」というのはよい。だが、「吾邦の大道」とは言われまい。

「吾邦の大道」という事になれば、これは、どうしても、「自然の神道ありこれ也」と言わなければならない。（P６６・L７）

・「吾邦自然の詠歌」である以上、「自然の神道」を離れてあるわけがない。（P６７・L１４）

◎「歌の事」は「道の事」に直結する。（P６８・L６）

◎歌の道を知る事は、「古の道をしるべき階梯なり」という言葉にしてもそうだ。（P６９・L８）

・「事しあれば、うれしかなしと　時々に　うごくこころぞ　人のまごころ」というのが「道の歌」なら、「歌物語は、其善悪邪正賢愚をばえらばず、ただ自然と思ふ所の実の情をこまかにかきあらはして、人の情はかくの如き物ぞといふ事を見せたる物也、それを見て人の実の情をしるを、物の哀をしるといふなり」（「紫文要領」巻下）というのは、「道の物語」に他ならず、もちろん、道を歌いのに、道を物語る準備が入用だったわけはない。（P６８・L１２）

「道」用例(3)

三十九章

・「うたとくば彼の国書に神道と云るは、測りがたくあやしき道と云ふことにて、其道のさまをさして神とは云るにて、道の外に神と云ふ物あるには非ず、然るを皇国にて迦微之道と云くば、神の始めたまひ行ひたまふ道、と云ことにこそあれ、其道のさまを迦微と云うことはなし、もし迦微なる道といはば、漢国の意の如くなるべけれど、其もなほ直に其道をさして云にこそなれ、其さまを云ふにはならず、書紀に神劍神亀などある神の字も、漢文の意に其徳をさして云るにて、あやしきたちあやしきかめと云ことなれば、迦微とは訓むべからず。（P83・L6）

四十章

・　敷嶋の　やまと心の　道とくば　朝日にてらす　やまざくら花（P91・L15）

◎（「玉勝間」）「おのれは、道の事も歌の事も、あがたゐうしの教のおもむきによりて、ただ古の書共を、かむがくさとれるのみこそあれ、其家の伝くゝととては、うけつたくたることゝ、さらになければ、家々のひめことなどいふかぎりは、いかなる物にか、一つだにしれることなし」（P100・L14）

◎宣長の学問は、歌の事から道の事に進んだが、ここで「道の事も歌の事も」と言っている、そのさりげない言い方から、よく感じ取られるように、出来上がった彼の学問では、道の正しさと歌の美さとの間に、本質的な区別など立てられはしなかった。同じ真実が、道となって現れもするし、歌となって現れもする。（P101・L5）

四十一章

・（宣長―和歌を好む性癖。）自分が持って生れてきた性癖を、鍛え、磨き、「世の有さま、人の此心ばく」が、いよいよ確かに見えて来るのなら、それが即ち学問の道と考えるのは、彼には、極めて自然な事であった。（P107・L6）

◎「ふる物語をみて、今にむかしをなぞらくゝ、むかしを今になぞらくて、よみならくば、世の有さま、人の心ばくをしりて、物の哀をしる」（「紫文要領」巻上）、この、歌学での上での基本認識は、彼の道の学問で、人生を物語りと観じて、よみならうという一種の眼力を鍛錬しない者に、人の道を説くことは出来ない、という確信に育つ。「世の有さま、人の心ばくをしりて、物の哀れをしる」という人生の知り方、人生の「こころ」を知るという知り方が、彼の学問の基本的方法なら、学問は、彼自身に密着せざるを得ないだろう。（P107・L10）

四十三章

・「国意考」に、「凡世の中はあら山あらのらの有か、人の住よりおのづから道の出来るが如く、こゝもおのづから神代のみちのひろゝりて、おのづからくににつけたる道のさもらはば」云々とあるが、これは「直毘霊」に、「古の大御世には、道といふ言挙もあらになかりき、其はただ物にゆく道こそ有りけれ、物のことわりあるべきすべ、万の教くゝことをしも何の道くれの道といふことは、異国（あだしくに）のさだなり」とあるところの原型と見てよいものだ。（P126・L9）

四十七章

・道とは何かと問われれば、自分は、神代の伝説に「見えたるまま」であると答えるに他はない、と宣長は言う。（P160・L11）

※参考　宣長以外の「道」

五章 儒教の道

・儒と呼ばれる聖人の道は、「天下を治め民を安んずるの道」であって、「私かに自ら楽しむ有る」所以のものではない。（P60・8L）

・孔子は、道を行うのに失敗した人である。（P61・6L）

九章 藤樹の「道」

・彼（藤樹）解く道の本とは何かを分析的に求めていくと、凡そ言説言詮の外に出て了う。

・彼（藤樹）の考えによれば、書を読むのに、「学んで之を知る道」と「思って之を得る」道とがあるので、どちらが欠けても学問にはならないが、

十章 仁斎や徂徠の「道」

・古今を貫透する「道」が強調されているが、その裏面には、古今の別ある「歴史」が、これに決して対立するものではない、という考えが隠されている。（P113・L12）

・道を問えぬ者が、歴史に問えるわけもない。（P113・最終行）

・歴史を考えるとは、意味を判じねばならぬ昔の言葉に取り巻かれる事だ。歴史を知るとは、言を載せて遷る世を知る以外の事ではない筈だ。ところで、生き方、生活の意味合いが、時代によって変化するから、如何に生くべきか、という課題に応答することが困難になる。（中略）「言は道を載せて以て還る」のである。道は何を載せても還らぬ。

・「そうじて学問の道は文章の外無之候。古人の道は書籍に有之候。（生き方？）

十一章

・彼等（仁斎や徂徠）の言う「道」も、この悦び（仕事に意味や価値を与える精神の緊張力、使命感）の中に現じた。道とは一と筋であった。（P121・L1）

・例えば仁斎の「論語」の発見も亦、「道」を求める緊張感のうちでなされたものに相違ないならば、（P122・L10）

十八章

・儒仏は物の哀しらぬようなるが其道にして、畢竟は、それも物の哀しるよりおこれる事也。

二十章 真淵の「道」

・「万葉」に関する真淵の感情経験が、はっきりと「万葉」崇拝という方向を取ったのは、学問の目的は、人が世に生きる意味、即ち「道」の究明にあるという、今まで段々述べて来た、わが国の近世学問の「血脈」による。（P226・L9）

・（「真淵のいう」「実」とは一体何なのか。）問いは、彼が捕えたと信じた「実」から生まれて、彼に向かったのではあるまいか。「道」とは何かとは、彼にとってそのような気味合いの問題として現れていたように見える。（P228・L18）

・「道」とは、何処からか聞こえて来る、誰のものともわからぬ、あらがう事の出来ぬ、真淵が聞いていた内心の声だったと言えるが、それはソクラテスのダイモンのように、決して命令の形をとらず、いつも禁止の声だったように思われる。真淵の意識を目覚ました声も、何が「道」ではないかだけしか、彼に、はっきりと語らなかったらしい。（P229・L4）

二十一章（真淵と宣長の決裂）道　歌の道

・「歌道と云って一つの道。」（P242・L16）

二十二章 歌

・歌に行く道は、歌を好み信じ楽しむ人にしか開かれていない。（P247・最終行）

・和歌は言辞の道也。心におもふ事を、ほどよくいひつづくる道也」という彼の言葉は、歌は言辞の道であって、性情の道ではない。（P252・L9）

「道」用例(5)

二十六章

・（篤胤）「とかく道を説き、道を学ぶ者は、人の信ずる信ぜぬに、少しも心を残さず、たとひ、一人も信じてが有まいとままよ、独立独歩と云て、一人で操を立て、一人で真の道を学ぶ、是を漢言で云はば、真の豪傑とも英雄とも、云ひ、また大和魂とも云うで御座る」（ＰＰ２９４・Ｌ１１）

三十二章儒教の道、道教の道

・「道」という古言は、古注には「道は礼楽を言ふ」とある通り、はっきり古聖人の遺した具体的な治績を指した言葉であって、これを離れて、別の道というようなものはなかったのである。宋儒（儒学者名）は道を訓じて、理となすが、明らかに、今言を以て、古言を視る妄である。（Ｐ１６・Ｌ６）

・「道は知り難し、亦言ひ難し。その大なるが為の故なり。後世の儒者は各々見る所を道とす。皆一端なり。」（Ｐ１６・最終行）

・「且つ学問の道は思ふことを貴ぶ」（Ｐ１７・Ｌ６　徂徠「弁道」）

・道とは歴史上の事実だが、今は既にない事実を、直に観察するわけにはいかない。それは「六経」という、現に有る若干の古言の証拠を通じて知る他はない。（Ｐ１７・Ｌ１３）

・孔子にとって、道を明らめるとは、古の聖人達が行った、ある特殊な営為を明らめることであったと徂徠「弁道」は解した。（Ｐ２１・Ｌ１５）

三十三章孔子、徂徠、宣長

・「学の道は、黙して之を識るに在り。」（Ｐ２７・Ｌ９）

・孔子は好んで、「我が道は、一を以て之を貫くなり」ということを言ったが、何を以て貫くかは言わなかった。言えなかったからだ。孔子の道は、もちろん先王の道である。（Ｐ２８・Ｌ１４）

「道」用例(6)